

那覇市の古墓調査 ―與那嶺家の墓と蔵骨器について―

大湾 ゆかり¹⁾

An investigation report on the tomb and urns of the Yonamine family, in Naha.

Yukari OWAN¹⁾

はじめに

沖縄の葬法は、火葬が一般化するまで、遺体を地中に埋めずに墓の中や周辺の場所である程度の期間空気にさらし、遺体が骨化した頃に洗骨し、洗った骨を墓に納める、いわゆる風葬であった。そのため、古い墓の内部には遺体を置くためのシルヒラシという空間と遺骨を納める蔵骨器（厨子（甕）という。）を置く段上のタナ、あるいは遺骨を合葬する貯蔵池（イケ、イキ等という。）等がみられる。

戦後、葬法が火葬に変わるにつれ新築の墓は小型化し形も変化してきたが、戦前から使われてきた古い墓は今でも沖縄各地でみることができる。これらの墓には門中で管理するもの、村で管理するもの、兄弟や友人同士で管理するもの等、地域によってさまざまである。最近では社会の変化とともに家族墓が増加し、納骨堂など新しい形式の墓も増えている。

一方、個人での管理が行き届かず放置された墓や、都市の発達によって住宅と墓地とが隣接する問題等が浮き彫りになってきた。また墓地管理の権限が市町村に委譲されたことによって、行政による墓地の整理事業が政策的に行われるようになった。このようにいろいろな要因で古い墓の整理がなされている現在は、将に沖縄の墓の変革期だといえよう。

本報告で取りあげる與那嶺家の墓も、都市計画区域の一角にあったため移転することになったものである。那覇市では、都市公園整備推進計画の中で、市街地に点在している墓地の場所を公園化し、一方増え続ける人口と墓の需要に対して納骨堂等を建設して集約化を図ろうとしている。これらの計画の一環で、最近では那覇市の中心市街地にある古墓群を撤去することになり、数年前から遺骨を移葬して墓

を明け渡す作業が始まった。その移葬に際し取り出した遺骨は火葬することが多く、そのため厨子甕等の蔵骨器の処分について当館に問い合わせが寄せられている。與那嶺家からも平成26年4月に連絡をもらい、墓開きの機会に墓室内の調査をさせていただくとともに、蔵骨器を一括して寄贈していただいた。本稿では、その時の記録をもとに與那嶺家の旧墓と蔵骨器について報告することにする。

1 那覇市の墳墓の状況

那覇市は、人口324,128人、世帯数149,091（平成28年11月現在）を擁する沖縄県でもっとも大きな都市である。『那覇市墓地等に関する基本方針』（平成22年）によると、那覇市の土地利用は飽和状態にあるが、その中で墳墓の数は増え続けている。平成14年の調査では市内には17,042基の墳墓が確認されているが、これは平成8年度の調査時より約1,600基増加した。また現在20.5%にのぼる3,501基の墓の管理状況が悪く、周辺の衛生状況が悪い墓も3,042基あり、新たな管理方法が求められている。

一方、沖縄戦により焼け野原になった那覇市は、戦後帰還を許されるまでの間に米軍の指示により都市計画事業が進められ、その中で1,700基余の古墓群がみられた辻原地区の墓がすべて撤去されたことがある。また、平成27年度から5カ年計画で那覇市は「那覇市都市公園整備推進計画（防災・安全）」（以下、「公園化事業」と称す。）を進めており、その対象区域の中に墓地が含まれた。そこで、墓の移転を余儀なくされた家では遺骨を運び出す際に火葬するケースが増え、残った蔵骨器を博物館に寄贈したいという依頼が寄せられているのである。当館ではこ

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

うした依頼を受け、まずは現地で墓や蔵骨器の調査を行い、その上で受入等を検討している。これまでに天久緑地と緑が丘公園（ナイクブ古墓群）、牧志南公園（松尾古墓群）の3カ所で墓開きに参加し、数十基の厨子甕を寄贈していただいた。



写真1 天久緑地の全景と那覇市の看板

今回報告する與那嶺家の旧墓は、天久緑地の一角にあった。天久緑地は、天久高台に接続する7.90haもの広大な丘陵地で、ここには大小さまざまな形態の墓が714基ある。同地は那覇広域都市計画事業の区域に入っているので、近い将来、これらの古墓群の整理が行われるようである。したがって、できる限り今のうちにこの立派な古墓群の記録を留めておく必要があると思う。なお、與那嶺家の旧墓の具体的な位置については、都市計画の関係でここでは言及しないことにする。

2 與那嶺家の墓の調査概要

與那嶺家は、林氏与那嶺筑登之上親雲上茂種を祖とする家系の分かれである。ご当主與那嶺茂良氏から、同墓は戦後しばらく開けていないので中に古い厨子甕が残っている可能性があるとの連絡を受け、平成26年4月25日の墓開きの日に調査させていただいた。

調査の概要は以下の通りである。

調査者：藤田（人類）・片桐（考古）・大湾（民俗）

調査日時：平成26年4月25日15時20分～16時30分

墓開きの儀式は、15時からすでに始まっていたので、詳細はわからないが、当日の主な流れは以下の通りである。

15時00分 読経。

15時30分

墓口の香炉を取り外し、繁茂した蔓を除草。



15時40分

墓が開いたので、墓室に入り内部を確認。18基の厨子あり。墓室内を簡易にスケッチ・測量し写真撮影。

15時50分頃

厨子を1基ずつ外に出し墓庭に並べる。

銘書（ミガチ）と納められていた遺骨を確認し、写真撮影。

記録を取り終わった厨子から業者が遺骨を取り出してビニール袋に移す。

門番（ジョウバン）の厨子以外の骨は全て合葬し、コンテナに乗せて搬出。

16時20分

空になった厨子に酒をかけて読経。

墓室に酒・米・塩をまいて清め、これまで使ってきたことへの礼を述べる。

最後に墓庭に塩をまいて清め、礼をして終了した。

お供え物：花・くだもの・お茶等



写真2 墓開きの儀礼

3 調査の結果

(1) 墓の構造と蔵骨器の配置

同墓は、厨子甕等の銘書から與那嶺家の墓として19世紀初めから使用されていたと思われる。石灰岩の岩盤を利用した掘り込み墓で、破風型の屋根が設けられている。右隣に同じ形をした墓が並んでおり、墓庭の間に石積みの塀があるので、いつの時代かに1つの墓を2分割したものと推定される。

同墓については、後日、平成27年度特別展「琉

球弧の葬墓制一風とサンゴの吊いー」の中で原寸大模型を作り展示するため、最新式のレーザー測量を行い、3Dで墓の内部を観察できるよう画像を作成した(図1)。それによると、墓全体の長さは9.6m、幅3.4m、高さ3.5mで、墓室内部の奥行きはおおよそ3.5m、幅2.4m、高さ1.7mであった。

墓開きの日に筆者等が簡易測量した結果では、墓口は高さ92～85cm、幅63cm、奥行き74cmで、人がかがんで入れる程の大きさ。入ってすぐに一段下がったシルヒラシ用の広い空間があり、正面に三

段のタナがあった。蔵骨器である厨子甕は、一番奥の段に4基、二段目に4基、三段目に4基の安置されていた。三段目の真ん中には、御殿型の小さな火葬用厨子があり、銘書から被葬者は戦後納められたものであることがわかった。この厨子が同墓の門番(ジョウバン)の役目を果たすものであった。また、墓の両袖にもタナがあり、ここには右に小さめの壺2基と左側にアンダガーミや赤焼鍋を転用したものが4基あった。

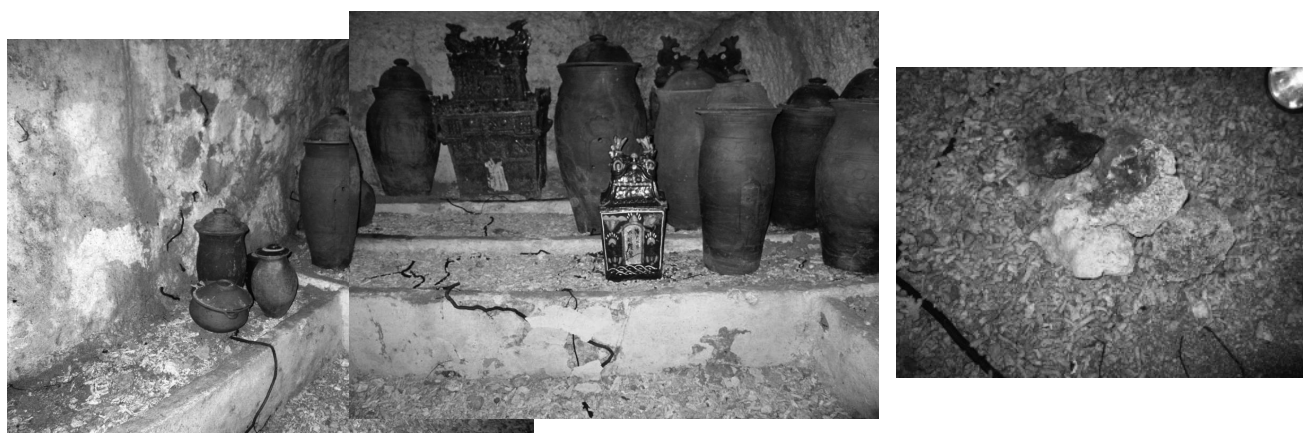


写真3 墓室内の蔵骨器の配置(左・中央) シルヒラシにあった5つの石(右)

墓室内は岩盤を削ってタナが造られ、そこにサンゴ礫が敷き詰められていた。また、シルヒラシの場所には石が5つ固めて置かれており、これは木棺を置くときの足として使われたものと予想される。長い間墓を開けたことがないとみえて、内部に木の根

っこがはびこり始めていた。しかし、長らく閉めきった空間であればカビが繁殖して臭いが充満し、かなり湿度が高いはずだが、同墓の内部は湿気もなく非常に良好な環境であった。

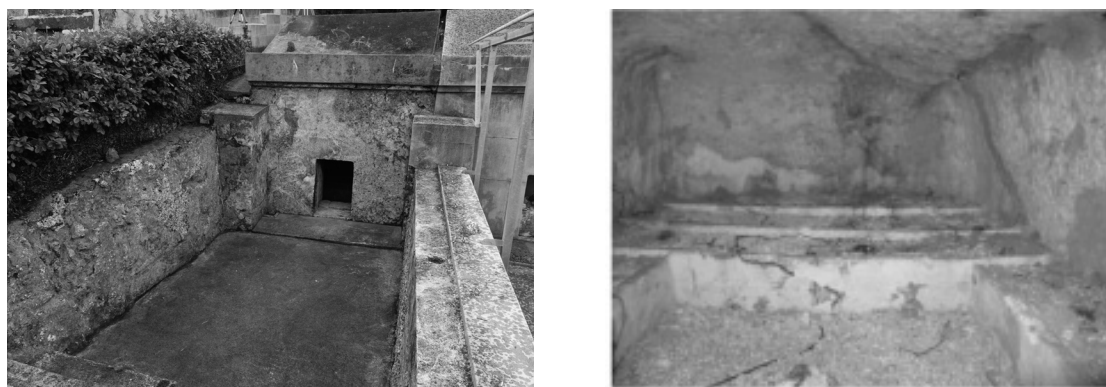


写真4 除草後の墓全景(左) 墓室内(右)

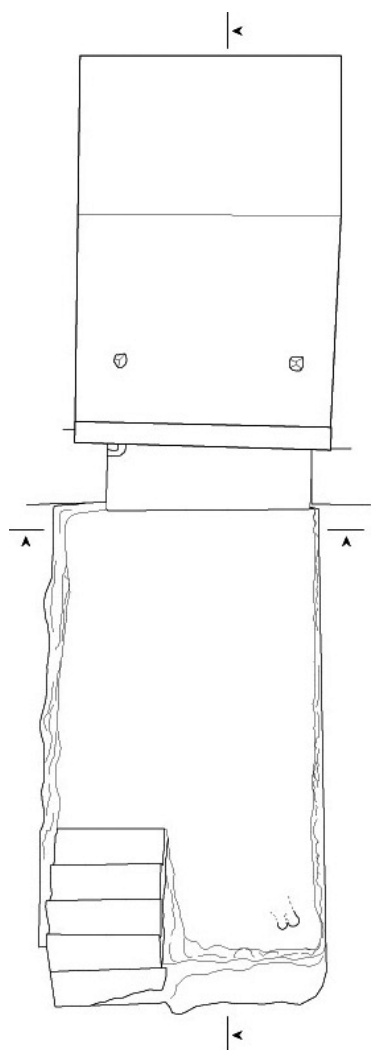


図1 レーザー測量による俯瞰図

(2) 蔵骨器の記録

この墓には、大型の御殿型厨子が2基、壺型の厨子が10基、油壺（アンダガーミ）や赤焼鍋等を転用して使ったものが5基、そして小型の火葬用骨壺（御殿型）1基があった。銘書では最も古いものが道光元年（1821）で、最も新しいものが昭和23年（1948）であった。この調査では人類学と考古学の学芸員が同行していたので、蔵骨器から遺骨を移すときに納骨の人数や性別、年齢等を記録することができた。また、後日與那嶺家の被葬者に関する資料（明治43年（1910）の『位牌名簿』を写し）をいただいたので、銘書の記載内容と被葬者を照合していただくことができた。以下、図3で記した厨子の配置番号の順に内容を記す。

墓室内平面図

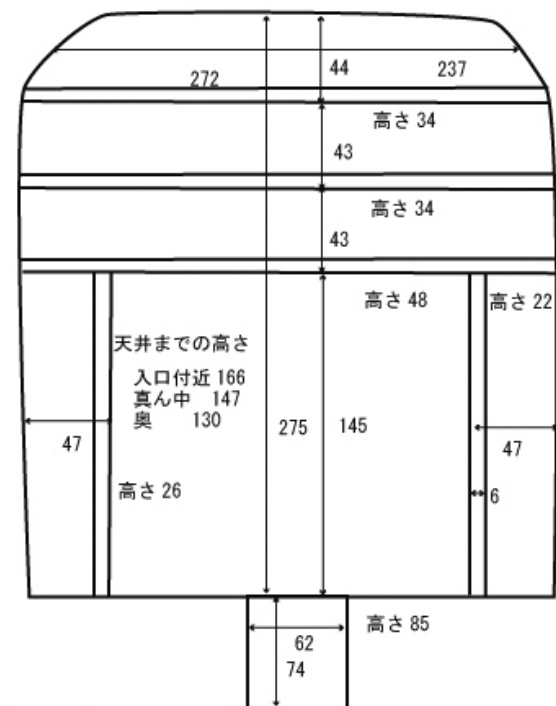


図2 現地での測量結果（実際の形状は図3参照）

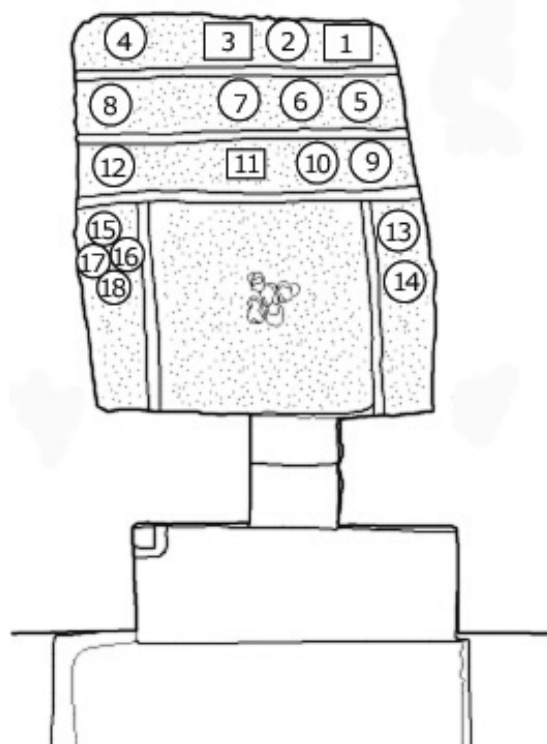
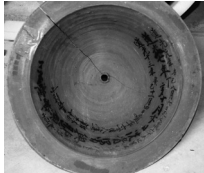


図3 レーザー測量による墓室内の俯瞰図
(数字は厨子の番号 ○甕形 □御殿型)

蔵骨器の概要（銘書の「/」で行の区切りあり、〔 〕内筆者注記）

①荒焼御殿型厨子 法量：蓋）縦46.5cm横35.5cm高さ34.7cm 身）縦38.5cm横51cm高さ41cm 安置されていた骨：成人男女各1体 銘書：永室/實心宗悟信士/四男嫡子與那嶺筑登之/道光四年甲申二月十六日死歳四十二 /同治四年乙丑九月五日死去歳七十八女同人妻永室妙榮信女妻/ 永室/咸豐二年子正月二十二日死歳七男孫たら/同七年巳十二月九日死歳一孫た ら男/同九年未十月十二日死歳六女□□□/同治拾年辛未十二月九日與那嶺筑登 之□□骨洗 資料との照合： ・與那嶺筑登之〔戒名〕實心宗悟信士〔享年〕42歳 道光4年2月16日死去 ・與那嶺筑登之の妻ウト 永室妙榮信女 78歳 同治4年9月5日死去 ・與那嶺親雲上男子 7歳 咸豐2年4月26日死去〔日付違い〕 ・與那嶺親雲上男子 1歳 咸豐7年12月9日死去 ・與那嶺親雲上女子 6歳 咸豐9年10月12日死去	 
②マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋）直径34cm高さ15cm 身）胴回り径40cm口径33cm高さ63cm 安置されていた骨：複数体 銘書：道光元年辛巳八月六日死亡歳六十五四男與那嶺筑登之親雲上壽岳宗永信士/道光 七年丁亥十月廿日洗骨四男與那嶺筑登之親雲上/道光十三年癸巳十一月四日歳 七十六女同人妻鶴林妙壽信女 資料との照合： ・與那嶺親雲上 壽岳宗永信士 65歳 道光元年8月6日死去 ・與那嶺親雲上妻 鶴林妙壽信女 76歳 道光13年11月4日死去	 
③上焼ツノ型厨子 法量：蓋）縦40.5cm横52.7cm高さ42.0cm 身）縦34.7cm横47.0cm高さ44.5cm 安置されていた骨：成人男女各1体 銘書：仙岳宗五信士/光緒六年庚辰五月十二日死去歳六十五與那嶺親雲上/同拾壹年乙酉 七月四日骨洗/梅林妙壽信女/光緒五年己卯十二月八日死去うし與那嶺筑登之親 雲上/妻歳六十一同拾壹年乙酉七月四日骨洗/光緒拾壹年乙酉七月四日正流女孫 骨洗/歳三真嘉戸同日正流女孫鶴歳一 資料との照合： ・與那嶺親雲上 仙岳宗五信士 65歳 光緒6年5月12日死去 ・與那嶺親雲上妻マカト 梅林妙壽信女 61歳 光緒5年12月8日死去〔名前違い〕 ・與那嶺蒲女子マカト 1歳 明治12年（光緒5）6月死去〔享年違い〕 ・與那嶺蒲男子 1歳 明治6年（同治12）死去	 

④マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径28.5cm高さ14.5cm 身) 胴回り径32cm口径27.5cm高さ51.5cm 安置されていた骨：成人女性1体 銘書：咸豊五年癸辰十一月十五日嫡子豊里可親雲上妻与母洗骨 資料との照合：不明	
⑤マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径26.5cm高さ11cm 身) 胴回り径29.5cm口径26.5cm高さ49.5cm 安置されていた骨：成人1体 銘書：光緒拾七年癸辰十一月二日死去歳八〇/同貳拾壹年乙未九月十二日洗骨松與那嶺 資料との照合：與那嶺蒲男子松 8歳 光緒17年11月2日死去	
⑥マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径27.5cm高さ11cm 身) 胴回り径30.5cm口径28.5cm高さ55.0cm 安置されていた骨：成人1体 銘書：昭和拾二年旧九月十八日洗骨/與那嶺蒲戸/昭和二〇年四月十三日死亡/洗骨 一九四八年八月十〇〇/妻チルと？(戦死〇〇ニ〇〇) 資料との照合： ・與那嶺蒲戸 69歳 昭和10年1月22日死去 ・與那嶺チル 77歳 昭和20年4月13日死去	
⑦マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径33.5cm高さ10.5cm 身) 胴回り径36cm口径30cm高さ68cm 安置されていた骨：成人複数 銘書：松ル新〇？ 娘與那嶺ウト〇〇/長男與那嶺蒲〇〇/夫婦〇〇〇亡與那嶺ウシ?昭和 十年旧五月十三日 資料との照合：不明	
⑧無釉陶器壺（附マカイ） 法量：マカイ) 直径5.4cm高さ12cm 身) 胴回り径17cm口径12.0cm高さ25.5cm 安置されていた骨：乳児1体 銘書：光緒五年卯十二月〇〇/與那嶺筑登之 資料との照合：不明	
⑨マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径29.5cm高さ13cm 身) 胴回り径30.5cm口径28.5cm高さ53cm 安置されていた骨：成人1体 銘書：昭和貳年旧八月貳〇下不明与那嶺蒲 資料との照合：與那嶺ウシ 80歳 昭和2年8月29日死去〔名前違い〕	

⑩マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径27.5cm高さ11.4cm 身) 胴回り径25cm口径26cm高さ54cm 安置されていた骨：成人1体 銘書：與那嶺茂誠/一九四八年八月十一日/名蒲戸 資料との照合：與那嶺茂誠（名蒲戸） 1948年8月11日死去	
⑪火葬用骨壺 銘書：蒲戸二男/與那嶺繁/三十三才 蒲戸二男與那嶺繁/昭和二十年四月十三日戦死 資料との照合：與那嶺繁 33歳 昭和20年4月13日戦死	
⑫マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径26.5cm高さ14.5cm 身) 胴回り径30cm口径28cm高さ54cm 安置されていた骨：成人1体 銘書：光緒十六年丁寅九月十五日洗骨仁王金城筑登之妻真嘉戸/同十二年丙戌六月廿三日死去/三代目之與那嶺親上/二男女子ま加戸/歳二十九口 資料との照合：與那嶺親雲上女子マカト 29歳 光緒12年6月1日死去	
⑬マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径22.5cm高さ9.5cm 身) 胴回り径26cm口径20cm高さ29.5cm 安置されていた骨：未成人1体、黒色炭化物 銘書：大正六年旧巳十月十五日與那嶺ウト女洗骨ニナル/死亡ノ日年五才 資料との照合：與那嶺ウシ 25歳 大正6年旧10月15日死去〔名前・年齢違い〕	
⑭無釉陶器壺（附マカイ） 法量：マカイ) 直径13.2cm高さ6cm 身) 胴回り径22cm口径16cm高さ34cm 安置されていた骨：乳幼児1体 銘書：明治三十八年旧三月拾三日/長男與那嶺蒲/子無名一人/カメ一人 資料との照合：與那嶺カメ 1歳 明治36年旧3月3日〔日付違い〕	
⑮施釉陶器壺（アンダガーミ） 法量：蓋) 直径12cm高さ3cm 身) 胴回り径17.5cm口径11.5cm高さ17.5cm 安置されていた骨：乳児2体 銘書：不明	
⑯無釉陶器壺 法量：蓋) 直径3.5cm高さ10.5cm 身) 胴回り径16cm口径11cm高さ23.5cm 安置されていた骨：乳児1体 銘書：なし	

⑰マンガン掛け焼締厨子 法量：蓋) 直径19cm高さ6.2cm 身) 胴回り径17.5cm口径18cm高さ30cm 安置されていた骨：成人火葬骨少量 銘書：与那嶺/与那嶺蒲戸四男仁王三十八才与那嶺蒲戸四男與那嶺仁王□□ 資料との照合：與那嶺仁王 38歳 大正5年旧1月17日死去	
⑱赤焼鍋 法量：蓋) 直径18cm高さ4.7cm 身) 幅24cm口径20.5cm高さ12cm 安置されていた骨：未成人1体 銘書：明治三十八年旧三月二三日洗骨四男與那嶺仁王女無名 資料との照合：不明	

以上、蔵骨器をまとめて紹介した。このうち⑪の火葬骨用厨子は、新しい墓に安置するため調査していない。残りについてはほぼ銘書があり、與那嶺茂良氏からいただいた資料と照合してできる限り被葬者名の特定を試みた。その結果、銘書から被葬者の名前はもとより役職、また死亡年月日や洗骨日、年齢等を読み取ることができた。また、墓室内の両脇にあった小さな蔵骨器は、ほとんど乳幼児の骨が入っており、これらを正面のタナにあげずにいたことがわかった。

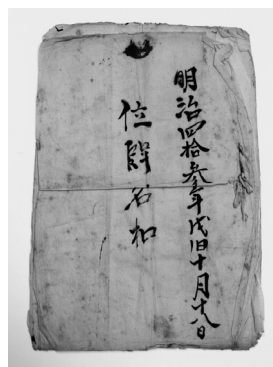
これらの蔵骨器は、⑪以外一括して当館に寄贈していただき、特別展等で原寸大に再現した墓室の中に展示した。これからも大切に保管し引き続き研究に活かしていきたい。

4 考察

前章で示した蔵骨器と今回使用した與那嶺家の『位牌名簿』及び「位牌記録」から、次のようなことがうかがえる。

(1) 蔵骨器の配置

図3で示した厨子の配置と各銘書の記録から一番奥のタナには比較的古い時代のものが置かれていることが分かった。もっとも古いのは②の道光元年(1821)で次に右奥の①の道光4年(1824)、その次に左奥④に咸豊5年(1855)の厨子



位牌名簿

が位置していた。④は「豊里可親雲上之妻」の銘があり、與那嶺家とのつながりは不明。奥の真ん中には③の上焼き御殿型厨子が位置。内容は光緒11年洗骨の嫡子與那嶺親雲上とその妻うしが納められていると思われる。

つぎに、二段目と三段目には、左右の端に光緒年間(1870年～80年代)の厨子が置かれ、中央付近には昭和初期の被葬者の厨子が並んでおり、亡くなられた順に厨子を安置したと考えられる。三段目の中央には火葬骨用厨子⑩とその隣に⑪が並び、いずれも戦後に納められたものであった。

最後に、左右のタナには味噌壺や油壺等を転用した小さな蔵骨器があったが、この中には主に乳幼児の遺骨がみられたので、奥のタナにあげずにいたのではないかと考えられる。大きな厨子の銘書には、乳幼児の記録も記されているが、実際には成人の骨しか入っていなかった例(③を参照)もある。これは、はじめから乳幼児の骨は分けて安置したか、あるいは後に乳幼児の骨だけ取り出して移したかのいずれかが考えられる。

(2) 洗骨の時期

③の資料ではこの厨子には4名の記録がみえるが、実際に入っていたのは成人男女各1体であった。被葬者は與那嶺親雲上夫妻だと思われるが、その孫2人のことも記されており、親と孫同じ日に一緒に洗骨したものと思われる。同じ日に洗骨した事例は⑭と⑱でも読み取れる。

(3) 火葬の始まり

大正5年の銘がある⑰の厨子には火葬骨が少量発

見された。明治の終わり頃に天久に火葬場ができていたので、この頃から火葬も行われていたことが推察される。

以上、若干ではあるが考察を試みた。墓と蔵骨器にはさまざまな情報が含まれており、まだまだ研究の余地がある。それらを読み解くことにより祖先の系譜や近代から現代につながる沖縄の墓の文化、当時の葬墓制の在り様が見えてくるように思う。そうした視点でこれからも勉強していきたいと思う。

おわりに

本報告では與那嶺家の旧墓と蔵骨器を取りあげたが、先述の通り当館では他にも墓の移転を余儀なくされた那覇市の古墓の調査を行った。墓は被葬者がいないときにはほぼ開ける機会がないが、こうした墓の移転のための墓開きでは、撤去される前の古墓の構造や厨子甕等の記録を取ることができ、古墓の記録保存に役立つと考えている。今回報告できなかった2つの墓については次回の課題とし、また、明治時代以前の埋め立てが進む前の那覇市の地形と古墓群の位置関係についても関心があるので、今後古地図等と現在残っている古墓群、あるいはすでに失われた場所等を照らし合わせて研究してみたい。

今回の報告に先立ち、厨子をはじめとする資料の寄贈や特別展での展示協力等、與那嶺茂良氏をはじめ関係者の皆様には多大なご協力をいただきました。ようやくその内容をまとめることができましたので、ここに記して深く感謝申し上げます。また、調査においては、藤田祐樹、片桐千亜紀、両学芸員にもご協力いただきました。合わせてお礼いたします。

参考資料

- ・那覇市都市公園整備推進計画のホームページ
<http://www.city.naha.okinawa.jp/cms/kakuka/hanamidori/seibichuu/H27-31sanko>
- ・那覇市2010『那覇市墓地等に関する基本方針』
- ・「市費で遺骨火葬 納骨堂も無料 墓地整理」『沖縄タイムス』1951,2,4 2面
- ・「消えるつじ原の墓地 程順則や安里大親も整理組に 那覇都計因習打破に一役」『沖縄タイムス』1951,2,8 2面
- ・與那嶺氏提供資料①『（與那嶺家）位牌名簿』明治43年戊辰10月18日 ②「位牌調査資料」
- ・仲程正吉編 1987『門中元祖便覧』月刊沖縄社
- ・岡本啓介2013「那覇市識名霊園周辺における《墓地スプロール地域》の形成過程」『立命館地理学25号』